The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	吐蕃のル ru に関する一考察 ―『編年記』における khram 「木簡帳簿」の用例から―
Author(s)	石川, 巌
Citation	内陸アジア言語の研究. 1999, 14, p. 103-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/16938
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

吐蕃のル ru に関する一考察
—『編年記』における khram「木簡帳簿」の用例から—

石川　巌

はじめに

ル ru[1] とは吐蕃[2]の行政区であり，yul「国」[3]の集合体である．この行政区の政治的機能は徴兵と徴税であり，その内部において戸は軍戸と民戸に分けられていた．このうち軍戸の部落は stong sde「千戸」と呼ばれ，各ルに 10 前後置かれたとされている．ルには中ル dBu ru，左ル g-Yo ru，右ル g-Yas ru，支ル Ru lag，第 3 ル Sum ru の 5 つがあり，吐蕃の中心的領域を構成した．以上述べたことは山口瑞鳳氏の研究に詳しい[4]．

ルに関する研究は山口氏が手掛ける以前からなされてきており，現在でも関心を集めている問題である[5]．ルに関する情報は後代の史籍に最も詳しく記録さ

---

(1)　ル ru は日本で「翼」と訳されるが，敢て用いない．一般に翼で想起されるのはモンゴルの軍事行政組織であろう．トゥッチ G. Tucci 氏や佐藤長氏が指摘したように (Tucci 1949, p. 738, 佐藤 1959, p. 756)，軍事組織としてのルは下部組織の構成等でモンゴルに類似しており，起源も北方遊牧民族の軍事行政組織にあるのかもしれない．しかしルはモンゴルの翼と大きく異る点がある．ルは険しい山並で仕切られた行政区であるのに対し，モンゴルの翼は軍団であって，その活動領域が大草原であるため，境界は漠然としている．それ故にルを「翼」と訳すと，モンゴルの翼と全く同一視され，そのような本質的な違いまで見失わせてしまう危険性がある．

(2)　本稿で言う吐蕃は 7 世紀から 9 世紀半ばチベット高原中心に存在したヤルルン Yar lung 王朝勢力である．

(3)　yul の基本的意味は「谷」である．yul はチベットで人間の生活拠点となり，そこに rgyal phran「小王国」が形成され，それが統合されて，統一王朝が成立した．故に yul は 1 つの政治社会とみなされうる．

(4)　山口 1983, pp. 822-905 参照．

(5)　例えば，古くには，Thomas 1935, pp. 276-286 で埋蔵本 Blon po bka'i thang『家臣に関する遺教』(山口 1983, p. 71 によれば，14 世紀後半成立) のル関係記事が研究され，最近では，楊銘 1997, pp. 269-281 でルの下位行政単位が研究された．

れているから，当然それらの記録が研究されて来た．しかしそれらの史籍のうち最も成立の早い lDe'u chos 'byung『デウ仏教史』でさえも 13 世紀半ばを遡らないという[(6)]．故に，一般的に言って，それらの史料的価値は吐蕃期成立の史料，すなわち碑文や中央アジア出土文献より遥かに劣るから，吐蕃期史料が第一の拠り所とされなければならない．これらの史料にはルを説明したものはないが，ルに関する多くの手掛かりが残されている．諸先学は早くからこれらの手掛かりにも気づき，成果をあげてきた．吐蕃期史料の中で敦煌文献『編年記』(P.T. 1288, I.O. 750, B.M. 8212 (187)) は 5 つのルに関する情報を直接的に知ることができる他に類を見ない史料であり，ウライ G. Uray 氏はこの点に着目し，2 つの論文を発表した．その 1 つは Uray 1960 で，ルの名称が見える記事を『編年記』中心に収集し検討したものであり，もう 1 つは Uray 1962 で，行政区と繋がりがある高官ドゥンパ brung pa と大ゲン mngan chen po に関する記事を同文献から収集し検討したものである．ウライ氏はこの 2 論文で次のような結論を導きだした．まず吐蕃本土に中，左，右の Ru gsum（3 つのルの意）が 684 年に組織され，その後に Ru lag, Sum ru といった補足的なルが組織された．Ru lag は 719～733 年，おそらくは 733 年に本国に組み込まれ，Ru bzhi（4 つのルの意）が組織された．ルは軍事・財政双方の行政単位である．

ウライ氏の上記所説はルが軍事・財政双方の行政単位であるということ以外，山口氏に全て否定された．山口氏は，まずウライ氏が Ru gsum の組織成立を 684 年に置く根拠は，行政区を意味するルが『編年記』で最初に見える年がこの年であると言うだけであり，ル制度の運用の開始は，ルの名こそ記されないものの，『編年記』の 654 年に記されていることを指摘する．次にウライ氏が ru gsum と ru bzhi を固有名詞扱いしている点を批判する．山口氏によれば，『編年記』における ru gsum と ru bzhi は単に「3 つのル」，「4 つのル」を意味し，成立順から数えて，ru gsum と言えば，中，左，右のルを指し，ru bzhi と言えば，これらに支ルを加えたものを指すと述べ，Ru gsum という統合体があって，

(6) Kuijp 1992, Karmay 1994, pp. 413-414 参照.

それがRu bzhiという統合体に再編されたとは読み取れないと主張する.[7]

しかし筆者は山口氏に賛成できない点がある. ru gsum, ru bzhiが固有名詞でないとしても, 中, 左, 右のルが吐蕃本土であったのは成立順から明かであり, 719～733年の間に支ルが上述の吐蕃本土に同化していったということは否めない. なぜならウライ氏が指摘するように, ru gsumの語は『編年記』の719年の条より後に見られず, ru bzhiの語は733年より前に見られない. その他にも, 後で述べるが, 『編年記』中にはウライ氏に有利な記事がある. この点に関して, ウライ氏は, 問題に関するキーワードが記載されている記事を収集し, 分析するという方法を用いて, 評価すべき成果をあげることに成功している.

本稿では『編年記』からkhram「木簡帳簿」の関連記事を収集し,[8] ルの徴税・徴兵体制について考察する. 木簡帳簿を表すのにkhramの語が使われたことは, 古くにトーマスF. W. Thomas氏により示された.[9] その後ボガスロフスキーB. A. Богословский氏が『編年記』にみえるkhramは税や労役の課税額や納税者人口の算定書を表すとした.[10] しかし同文献のkhramが財政関係帳簿のみを表すとは思えない. 筆者はこれらの帳簿が財政関係と軍政関係の2種に大別できると考えている.[11] まず, 財政関係のkhramを見, 次いで, 軍政関係のkhramを見ることにする.

---

(7) 山口 1983, pp. 862-871参照.

(8) 記事の収集に関してはImaeda 1990を利用した.

(9) Thomas 1951, pp. 91-92, 326-327参照. 語源について, トーマス氏は, この語がkhrama「帳簿」にさかのぼる可能性を示した. 語源はどうであれ, 現在の辞書でkhramの意味を調べると, khram「格子模様」(張怡蓀 1993, p. 275), khram kha「魔法で用いられる図表; 木に刻まれた十字」(Das 1902, p. 169),「格子模様; 魔物を呼び寄せる木牌で, 格子模様が刻まれているもの」(張怡蓀 1993, p. 275)等を見出す. このように, 辞書は, khramの核たる意味が「直線の組み合わせによる表現」であること, また木材を素材としたkhramがあることを証言している. トーマス氏の指摘にあるように, 東トルキスタン出土のチベット木簡には, 刻み目が付けられたものや線で区切られたものが多く見られる.

(10) Богословский 1961, pp. 63-64参照.

(11) 後述するが, 『編年記』における軍政関係のkhramについて, チュンペーChos 'phel氏の指摘がある.

1. 徴税組織の変化と支ルの本土化

『編年記』において財政関係の khram とみなしうるものには，khab soe khram と thang khram がある．前者は1例のみ見られる．

dbyar 'dun lha gab du 'bon da rgyal dang/ blon chen po khri gzigs gyis bsduste/ mngan gyi khab soe khram spos/ (I.O. 750, ll. 109-110)

[707年] 夏，会議がハカプでブンダゲーと，宰相ティシクによって招集され，ゲンの財政簿が取り換えられた．

khab so は「国庫」あるいは「財政」の意味であるから，khab soe khram は「財政簿」の意であろう．mngan の語が属格助辞 gyi を伴うことにより，この語を限定しているから，この帳簿は財務官の一種であるゲンの職務において利用されたものと思われる．(12)

thang khram は3例見える．このうちルとの関連で重要と思われる2例を引用する．

'dun ma mkhar phrag du/ blon khri sum rjes bsdus nas/ mngan dang/ slungs stod smad gyi thang khram chen po btab/ (I.O. 750, ll. 170-171)

[721年冬]会議がカルタクで，論ティスムジェにより招集された後，ゲンと農地(13)上手区域下手区域の大管轄簿が設けられた．

dgun 'dun byar lings tsal du blon chen po cung bzang gyis bsduste/ mngan chen po brgyad las/ bzhir bcos pa'i tang(14) khram btab/ (I.O. 750, ll. 199-200)

[728年]冬，会議がジャルリン林で宰相チュンサンにより招集され，大ゲンを8人から4人に改正した管轄簿が設けられた．

上記2例から thang khram がゲンと農地に関することを記したものであることが分かる．複合語 thang khram の第1要素の thang は mnga' thang「権威」，

---

(12) khab so と mngan については，石川 1998 , p. 49 参照．

(13) slungs は klungs「農地」の異綴であろう．王堯 1992, p. 78 では，これをヤルルン Yar klung と同定するが，特に slungs を固有名詞と考えなければならない理由はないように思われる．

(14) tang は thang の異綴であろう．

dbang thang「権力」，thob thang「所得分量」の第2要素であり，『蔵漢大辞典』で「規格」「標準」の意と説明されているような分量[15]・範囲を表す thang と考えられる．故に，おそらく thang khram は，ゲン各々の徴税担当地区を割り当てた木簡帳簿であると思われる．721 年の条は『デウ仏教史』や『家臣に関する遺教』のルに関する記事を想起させる．その記事では前述の ru bzhi「4ル」における stong sde「千戸」が列挙されるが，各ルの千戸は上手区域と下手区域に割り振られている[16]．もしも 721 年の条に記された農地が4ルの農地であり，ルの上手区域，下手区域のそれぞれにゲンの管轄簿が作成されたとするならば，ゲンは各ルに2グループ置かれることになるから，4ル全体で8グループ置かれたことになる．このことは 728 年の条で裏付けられる．この条に記された大ゲンは，例えば blon[17]「論」の長が blon chen po「大論」で示されるのと同じように，ゲンの長官を表すと思われる．この年にゲンの管轄簿が改正され，大ゲンが8人から4人とされたのだから，改正前の管轄簿は大ゲンの数が8人ということになる．この大ゲン各々が4ルに置かれたゲンの各グループを取りまとめていたと考えると，改正前の大ゲン数は先に推定したゲンのグループ数に一致する．故に 721 年の条で述べられた農地は8つの徴税区から成る4ルの農地である可能性が高い．大ゲンの数が8から4に変化したことは，おそらく大ゲン1人の管轄区域がルの半分からル全域に拡がったこと，すなわち4人の大ゲン各々がル1つを担当するようになったことを示すと思われる．

この改革が大規模かつ重要事であったことは，その2年前からの下準備が『編

---

(15) 張怡蓀 1993, p. 1140 参照．

(16) DC, pp. 259-261 参照．BK, f. 12b, l. 6~f. 15a, l. 5 参照．中国で出版されたチベット語文献の校訂本は誤植が多いとされているが，一般に利用できるものとしては，その『デウ仏教史』しかない．校訂が悪いとはいえ，先に述べたように，ルに関する情報を記載した後代史料の中では最も成立が古く，しかも最も詳しいという重要性を鑑みるに無視するわけにはいかない．

(17) blon とは吐蕃王家の興隆の際に家臣となり，法制の確立により高級官僚化した氏族のうち，zhang と呼ばれる外戚を除いた者たちである．漢籍において blon は「論」，zhang は「尚」で音写されている．山口 1983, pp. 533-543 参照．

年記』に記載されていることから窺える．『編年記』は次のように述べている．

mngan mched brgyad las bzhir bcos pa'i zlugs gyi ring lugs bkye'/ dpyid blon chen po mang zham gyis/ zlor bsduste/ mngan gyi thang sbyard/ khab so'i khrald pa bskos/ (I.O. 750, ll. 189-190)

[726年冬]大ゲンを8から4人に改正した官僚制度が布告された．春，宰相マンシャムにより，[会議が]ドで招集されて，ゲンの権限が適用され，国庫の税負担者[18]が任命された．

この記事から thang khram「管轄簿」改正の2年前，726年冬に早くも大ゲンの人数を8から4人に変えた財務官僚組織が発足し，年末の春には[19]その新組織による税制が開始されたことがわかる．

thang khram「管轄簿」が設置された721年とその改正がなされた728年はウライ氏により Ru lag「支ル」が吐蕃本土に同化していったとされる期間，719～733年の間にある．故に721年に支ルの徴税面における吐蕃本土への組み込みがなされ，728年には支ルを含む ru bzhi「4ル」において，より集権化が進んだ徴税組織が整備されたと思われる．

---

(18) khrald pa は，現在の辞書にある通り，「納税者」の意味であり，山口 1983, p. 492 でのように，「収税吏」と訳すべきではない．山口氏は khrald pa を khral pon と同義と考えているようであるが，吐蕃支配の敦煌における官僚の序列を示す P.T. 1089 に khral pon の語は見えても，khrald pa の語は見えない．また『編年記』に khrald pa はこの箇所にしか見えないが，その異綴 khral pa が746年の条に見え，

btsan po bkas/ stong sde'i gle'u thogsla/ khral pa gu du spags/ (I.O. 750, l. 254)

ツェンポは勅命により千戸の未開の中洲に税負担者を移住させた．

とある．gu du は gud du「一方に」「別に」「他に」であり，動詞 spags「移した」の意を強めている．すなわち於格助辞 du は de nyid である（Yamaguchi 1990 参照）．文脈から考えて，この khral pa は紛れもなく税を支払う義務を負う農民である．ただ本文で引用した箇所での khrald pa は動詞 bskos「任命された」の対象格となっており，一般人民に対してこの動詞が使用され得たかが問題となるが，同文献の693年の条に 'brog bskos「牧民が任命された」とあるから(I.O. 750, l. 64)，異論の余地はない．このような動詞 bskos「任命された」は，徴税対象である戸のゲンへの割り当てが決定されたことを言っているのであろう．

(19) 吐蕃暦は季春に始まり仲春に終わる．山口 1982, pp. 141-144 参照．

上記見解を傍証する記事も『編年記』にある．それは692年の条で，次のように述べている．

dbyar 'dun shong snar 'duste/ mngan chen po drug du bskos/ (I.O.750, ll. 60-61)

[692年] 夏，会議がションナで招集され，大ゲンが6人に任命された．

徴税面において支ルが吐蕃本土に組み込まれる以前は，吐蕃本国における徴税組織は中・左・右のgsum ru「3ル」のみに敷かれていたはずであり，前述した通り728年の改正まで各ルに大ゲンが2人置かれていたならば，721年のthang khram「管轄簿」設立前においては，大ゲンの数は6人であったことが推測される．692年の記事はこの推測を裏付け，この年の段階では吐蕃本国の徴税組織が支ルの領域にまでは敷かれていなかったことを示している．

2．軍政関係木簡帳簿 dmag myi khram, khram dmar po, zhugs long dmar po

最も疑念を持たず，軍政関係のkhramとみなせるのはdmag myi khram「軍人簿」である．これは『編年記』に1例のみ見られる．

yul yul dmag myi khram skya brtsis/ (I.O. 750, l. 246)

[744年夏] 国々で軍人簿の [軍戸] 移籍[20]が調査された．

この軍人簿はyul「国」単位で作成されており，移籍が調査されたとあるから，軍戸に関する帳簿であると思われる．同年冬に興味深い記事が続く．

dgun 'dun skyi sho ma rar/ blon chen po cung bzang dang blon skyes bzang gnyis gyis bsduste dmag myi mkhos chen po bgyiste/ btsan po bkas khram dmar po shog shog ser po la spos par lo chig/ (I.O. 750, ll. 247-248)

---

(20) Bacot 1946, p. 52と王堯1992, p. 154はskyaを色彩を表す形容詞と考えているが，それならばkhram skyaではなく，後述するkhram dmar po「赤帳簿」と同じく，khram skya boとなるはずである．なぜならば，『編年記』においてkhram dmar poがkhram dmarと記載された例は一つとしてなく，それと同様に，同文献においてkhramにこの語を限定する色彩形容詞が後置される場合は，その形容詞に接尾辞が付されると考えられるからである．この場合skyaは動詞skya ba「移転する」に関係し，軍人の移籍を表すと思われる．

[744年]冬，会議がキ・ショマラで，宰相チュンサンと論ケーサン2人により招集され，大徴兵がなされ，ツェンポの勅命により赤帳簿が黄色い紙に書き写され，1年[が終わった].

トーマス氏はkhramが木簡帳簿を表すことを示すために，この記事にkhram dmar po「赤帳簿」が紙に書き写されたとあることを指摘した.[21] しかし，この赤帳簿について，さらに一歩踏み込んだ推測をなしうる．同年夏の軍人簿による軍戸移籍の調査は明らかに冬の大徴兵の準備である．さらに，大徴兵の記事直後に記載される帳簿の書写も，徴兵関係の事務であると考えるのが合理的である．つまり赤帳簿は軍人簿そのものではないにしても，少なくとも，徴兵関係の木簡帳簿とみて大過ないであろう．

『編年記』のkhram dmar po「赤帳簿」の用例は744年の条以外に5例あるが，(地名＋属格助辞＋) khram dmar po「赤帳簿」＋動詞btab「設けられた」という構造か，地名＋属格助辞＋ khram dmar po「赤帳簿」＋動詞brtsis「調査された」という構造の文節となっている.[22]

それらの用例における地名を総て列挙すると，rTsang chen pha「大ツァン」，sku srungs (= sku srung gi stong sde)「親衛千戸」，ru gsum「3ル」，ダクポDags poである．大ツァンは，別稿で詳説する予定であるが，後代史料に見えるRu lag「支ル」の原名と考えている．親衛千戸は，『デウ仏教史』やmKhas pa'i dga' ston『学者の宴』のJaの章（1545年成立）によれば，支ルにsKu srung lho phyogs pa「南面親衛千戸」，右ルにsKu srung nub phyogs pa「西面親衛千戸」，中ルにsKu srung shar phyogs pa「東面親衛千戸」，左ルにsKu srung byang phyogs pa「北面親衛千戸」があるとされ，4ルに各1つずつ置かれたことがわかる.[23] おそらく吐蕃の四方を守備する精鋭部隊を供給する千戸であろう．ここで山口氏の研究によ

(21) Thomas 1951, pp. 326-327 参照.

(22) I.O. 750, ll. 54- 55, 61, 115-116, 136, 156-157 参照.

(23) DC, pp. 258-259 参照．KG, f. 19b, l. 6 ~ f. 20a, l. 2 参照．ただし『デウ仏教史』は左ルの親衛千戸をsKu srung shar phyogs paとするが，他のルにおける親衛千戸名は『学者の宴』と同じなので，原本の誤記か校訂本の誤植であろう.

り4ルの位置関係を見る.[24] 中央チベットの現ウー地方におけるツァンポ江北側に中ル，南側に左ルがあり，中ルから見てやや南東に左ルの領域が広がっている．そして中ルと左ルの西に右ルが接しており，そのさらに西に支ルが接し，現ツァン地方を東西に2分している．このような構図に基づいて親衛千戸を考えると，最も西側の支ルが南面，西よりの中央にある右ルが西面，東よりの中央にある中ルが東面，最も東側で中ルの南にある左ルが北面の親衛隊を供給したことになる．親衛隊の千戸と守備地をこのように配した理由は，ある親衛隊が離反した場合，別の親衛隊がすぐ離反者の千戸を攻撃することを可能にするためであり，親衛隊同士に互いを監視させる方策ではないかと推測される．3ルについてはもう説明は不要であろう．ダクポは左ルに属する stong sde「千戸」である.[25] ともあれ，これらの地名は皆ルか千戸を示し，これらにおいて赤帳簿が作成されたことがわかる．

しかし，ルか千戸単位で赤帳簿が作成されたというだけでは，赤帳簿が軍政関係の木簡帳簿であるという推測の妥当性を証明することはできない．khram dmar po「赤帳簿」と関連のある語を見出し，その用例を検討することが必要となる．そのような語は最近すでにチュンペー氏によって『編年記』中に見出された．それは zhugs long dmar po「赤鏡」である．チュンペー氏によれば，この語は khram dmar po「赤帳簿」と同一の対象を指し，軍役関係の木簡帳簿であると言う.[26] しかしチュンペー氏は両語の同一視に関する根拠を明示していない．以下，チュンペー氏に代わり，筆者がその根拠を示す． zhugs long dmar po の用例は『編年記』中に3例ある．

'dun ma glag gi pu cung du 'duste/ zhugs long dmar pho brtsis par lo gcig/ (I.O. 750, l. 10)

[674年冬，]会議がラクギ・プチュンで招集され，赤鏡が調査され，1年[が終わった]．

(24) 山口 1983, pp. 824-832 参照.

(25) 山口 1990, p. 475 の表，また DC, p. 258 参照.

(26) Chos 'phel 1990, pp. 143-144, 147 参照.

dgun skyi bra ma tang du 'duste/ zhugs long dmar poe rkang ton bgyis par lo gchig/ (I.O. 750, ll. 58-59)

[691 年]冬，[会議が]キ・ダマタンで招集され，赤鏡の精鋭を徴して[27]1 年[が終わった].

'dun ma 'on cang dor 'duste/ ru lagi zhugs long dmar pho brtsis/ (I.O. 750, l. 122)

[709 年冬，]会議がウンチャンドで招集され，ルの支部の赤鏡が調査された[28].

ここで 674 年と 709 年の条を見ると，(地名 + 属格助辞 +) zhugs long dmar pho「赤鏡」+ 動詞 brtsis「調査された」という構造をしており，先に見た khram dmar po「赤帳簿」が同じ動詞をとった文と同構造である．また後代のチベット

---

(27) 『編年記』に rkang ton bgyis という表現は他に 2 例見える (I.O. 750, ll. 8, 221)．rkang は「中核」の意味があるから，選抜きの兵士の意であろう．敦煌文献『年代記』第 8 章でシャンシュン Zhang zhung に輿入れした吐蕃の王女セーマルカル Sad mar kar がツェンポ宛にシャンシュン討伐を勧めた歌を歌うが，その一節には

bran gyi ni skal pog pa/ gu ge ni rkang pran zhig/ 'khol du ni ma tho 'am/ gu ge ni bdris shing sdang/ (P.T. 1287, ll. 409-410)

家来となる縁があったなら，グゲは少しばかりの精鋭．使役するには値打がないか．グゲは馴染んでも敵意を持つ．

とある．訳文は山口氏の解釈に従っている (山口 1983, p. 399 参照)．ここではシャンシュンの代表的な地名グゲによってシャンシュン人を表しているが，彼等が選抜きの兵士であることを rkang の語で示している．また本文引用での ton は他動詞 'don「出す」に関係し，rkang ton で「精鋭を徴すこと」を意味するのであろう．

(28) 佐藤長氏は「支翼のシュクロンマルポ占領せられたり」と訳し，支ル内のシュクロンマルポの地を中心とする地方勢力が反乱を起こし，滅ぼされたことを述べる記事と考えている (佐藤 1981 pp. 58-59 参照)．しかしこの ru lag は後代史料に見える Ru lag「支ル」を指す固有名詞ではなく，ru gsum「3 つのル」設置後に設けられたルを総称して言う語であり，『編年記』で支ルは rtsang chen「大ツァン」と呼ばれていると思われる．以上の見解は稿を改めて論証するつもりであるが，たとえ『編年記』の ru lag が支ルであったとしても，佐藤氏の解釈には問題がある．674 年の条にも 709 年と同じく zhugs long dmar pho brtsis とあるので，佐藤氏の解釈が正しければ，709 年より前にもシュクロンマルポの占領があったことになる．また zhugs long dmar po を地名とすると，691 年の条はシュクロンマルポという地域での徴兵を述べた記事となり，709 年の占領以前に，この地から徴兵がなされたということになる．故に佐藤氏の見解は成立しがたい．

語でme long「鏡」が書物の意で使われることがある．例えばサキャ派のソナム・ゲンツェン bSod nams rgyal mtshan 著の有名な史籍は rGyal rabs gsal ba'i me long『王統を明らかにした鏡』と呼ばれている．zhugs long は me long「鏡」の敬語であるから，zhugs long dmar po は赤い書物の意で使われたと考えられる．故に確かに両語が同種の木簡帳簿を指示する可能性は濃厚である．ここで 691 年の条を見ると，赤鏡に基づいて徴兵がなされているから，これは徴兵関係の木簡帳簿と見て間違いないであろう．そうであるならば，先の推測通り，これと同種の木簡である赤帳簿についても同様に見ることができ，チュンペー氏の見解が妥当であることが証明される．

おわりに

敦煌文献『編年記』の khram「木簡帳簿」に関する記事を中心に分析した結果，次のことが判明した．『編年記』の khram は財政関係と軍政関係の 2 種に大きく大別される．そしてこれらの木簡帳簿はルやその下位の行政単位を対象に作成された．このことはルが財政・軍政双方の行政単位であることを証明する．徴税に関して，726～728 年の徴税組織改革以前にはルの領域半分につき，以降にはル 1 つにつき 1 人の財務長官 mngan chen po「大ゲン」が置かれ，その領域における徴税を総括し，そのもとで，財務官 mngan「ゲン」各々の徴税担当地区を割り当てた木簡帳簿 thang khram「管轄簿」に基づいて徴税が実施されたと思われる．また大ゲンの人数変化から吐蕃本土が ru gsum「3 ル」から ru bzhi「4 ル」に拡大した過程が窺える．徴兵はルか，その下位行政単位から khram dmar po「赤帳簿」あるいは zhugs long dmar po「赤鏡」と呼ばれる木簡帳簿に基づいて実施されたと思われる．

東トルキスタン出土チベット語木簡にはこのような木簡帳簿の実例はないだろうか．残念ながら，『編年記』に述べられるような名称を持つ木簡はまだ発見されていない．また木簡類は『編年記』以上に記述が簡潔かつ断片的であるので，内容を判定するのが難しく，『編年記』の情報を実例と照合するのも困難で

ある．ローナ=タシュ A. Róna-Tas 氏やチュンペー氏，武内紹人氏は赤く塗られた木簡を khram dmar po「赤帳簿」等に結び付けるが，[29] 色の一致だけでそれらを同一視することはできない．なぜならば，朱塗りの木簡が『編年記』の赤帳簿の類にのみ使用されたとは限らないからである．実例発見の可能性としては，木簡類の書式を分類し，内容判定の指標とすることができれば，問題の解決に繋がるかもしれない．私信によれば，現在，武内氏が木簡類の整理をしており，スタイン将来のものについては，図録・目録をデータベースとしてコンピュータで公開し，その概説を書籍の形で公刊すると共に，ロシア蔵のものについては，ヴォロビヨヴァ=デシャトフスカヤ M. Воробьёва-Десятовская 氏との共同研究で公表するとのことである．木簡書式の研究に大きな寄与が期待される．

本稿では Ru lag「支ル」の吐蕃本土への同化が部分的に論じられたが，その事情を，もう少し立ち入って考えられないだろうか．今後は現ツァン地方への吐蕃勢力の進出，その地域におけるルの設置，支ルの本土化の事情を，敦煌出土チベット語文献，漢文史料，後代のチベット史籍を総合的に用い，地名考証を交え，解明したい．

引用文献

BK　*Blon po bka'i thang*. Ed. Paro, 1976.

DC　*mKhas pa lde'us mdzad pa'i rgya bod kyi chos 'byung rgyas pa*. lHasa, 1987, 西蔵自治区社会科学院蔵文古籍出版社による校訂本.

KG　*mKhas pa'i dga' ston*, part 4. Çatapiṭaka, New Delhi, 1962.

Bacot, J. ; Thomas, F.W. ; Toussaint, Ch.

1946　*Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Paris.

Богословский, В. А.

1961　О налоговых терминах в тибетских документах VII-IX вв. *Китай Япония история и филология*, Москва, pp. 58-65.

Chos 'phel

1990　Bod kyi khram yig dang byang bu'i skor rags. *Bod ljongs zhib 'jug* 1990-4, pp. 137-149.

(29)　Róna-Tas 1956, pp. 166-167; Chos 'phel 1990, pp. 143-144; 武内 1991, p. 40 参照.

Das, S. C.

1902 *Tibetan-English dictionary*. Calcutta.

Imaeda, Y. ; Takeuchi, Ts.

1990 *Choix de documents tibétains III*. Paris.

Karmay, S.

1994 The origin myths of the first king of Tibet as revealed in the Can-lnga. *Tibetan Studies*, vol.1, Oslo, pp. 408-429.

Kuijp, L. van der

1992 Dating the two lDe'u chronicles of Buddhism in India and Tibet. *Asiatische Studien* 46, pp. 468-491.

Róna-Tas, A.

1956 Tally-stick and divination-dice in the iconography of lHa-mo. *Acta Orientalia Hungaricae* 6, pp. 163-179.

Thomas, F. W.

1935 *Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan*, part I. London.

1951 *Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan*, part II. London.

Tucci, G.

1949 *Tibetan painted scrolls*. Roma.

Uray, G.

1960 The four horns of Tibet according to the Royal Annals. *Acta Orientalia Hungaricae* 10, pp. 31-57.

1962 The offices of the Brung-pas and great mNgans and the territorial division of central Tibet in the early 8th century. *Acta Orientalia Hungaricae* 15, pp. 353-360.

Yamaguchi, Z.

1990 The grammatical function of de-nyid. *Acta Orientalia Hungaricae* 44, pp. 251-257.

石川巌

1998 「古代チベット語 chab srid および chu srid の語義」『内陸アジア史研究』13, pp. 35-54.

王堯・陳踐

1992 『敦煌本吐蕃歴史文書』(増訂本) 北京.

佐藤長

1959 『古代チベット史研究』下. 同朋舎, 京都.

1981 「羊同国の所在について」『鷹陵史学』7, pp. 45-70.

武内紹人

1991 「チベット・中央アジアの木簡」『月刊しにか』1991-5, pp. 35-40.

張怡蓀

1993 『蔵漢大辞典』北京.

山口瑞鳳

1982 「チベット史料の年次計算法」『東洋学報』63-3/4, pp. 141-168.

1983 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店, 東京.

1990 「吐蕃王朝外戚支配機構「尚論」制の成立と意義」『東アジア古文書の史的研究』刀水書房，東京，pp. 447-478.

楊銘

1997 『吐蕃統治敦煌研究』台北.